

→「道鏡はすわるとひざが三つでき」—悪人か？道鏡のふるさとを歩く

2019.8.11（日）カルチャーウォーキング

関西文学散歩 第548回 参加報告

鳥居の左横に「由義宮旧址」(→写真)と刻まれた大きな石碑が立っていた。由義宮は『奈良朝の政変と道鏡』によると、仏教で国を守り安泰する思想を父・聖武天皇から受け継いだ、女帝・孝謙天皇（重祚・称徳天皇）と、彼女が道鏡とともに「夢見た」都なのである。その後は、冷房の効いた旧植田家住宅で昼食し、伊東先生の講義があり、帰りに物部氏の祖霊を祀っているという渋川神社



を訪れ、午後3

時、JR八尾駅(←写真)での解散であった。

帰宅後、『奈良朝の政変と道鏡』を再読した。史料を忠実に読み解き、かつ、登場人物の心の内面を推し量っている、この本を読み進むうちに道鏡の人物像が変わってきた。それは称徳天皇の人物像が分かってくる過程で、一層進んだ。即ち、

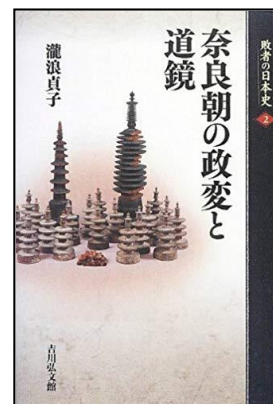


称徳天皇は奈良朝末期、天武系の皇統を守るべく

重祚した女帝であるが、厳格誠実でかつ、臣下に対する配慮が細やかな慈愛に満ちた女帝である。その病を看病したことが縁で女帝に重んじられ、法王にも上り詰めた道鏡は、仏教による「鎮護国家」の治世を推し進めようとしていた彼女が頼りにする「師範」であった。

女帝は自らの意思で道鏡の皇位願望を退け、道鏡は彼女の崩御により左遷されるのだが、道鏡が女帝と男女の仲だったという「醜聞」は、実権を取り戻した藤原氏が『続日本紀』などを通じて、仕立て上げたものに違いない。今回、サブテキストを読み直し、『古事談』や『日本霊異記』などの説話集、江戸時代になってからは「道鏡はすわると三つ膝ができ」と面白おかしく川柳にまでなっていて、道鏡は貶められたのだということが分かった。

このことを今日に置き換えると、次のようにいえまいか。即ち、日本史の教科書について、近現代史部分は先の戦争の勝者・連合国側の都合のいい書き方になっている、と。



<報告：石元英雄（2019.8.21）>